



作家の土俵

安部龍太郎

作家にとってもっとも身近な紙は原稿用紙である。今はパソコンで小説を書く方が多いようだが、私は昔ながらに原稿用紙と万年筆を使っている。

三十代半ばから十年ほどパソコンを使ったが、どうも性に合わない。ペンを使えば書いた内容が脳にフィードバックしている手応えがあるが、パソコンだと放出したままどこかへ消えていく感じがする。

しかも一日十時間ちかくパソコンに向き合っていたので、**腱鞘炎**や**網膜炎**に悩まされるようになり、万年筆で書くスタイルに戻した。

それ以来、原稿用紙は神楽坂の相馬屋のものを使っている。市販のものは紙が薄すぎてインクがにじんだり、手触りが

悪かったり、書いている最中に名状しがたい苛立ちに駆られることがある。

しかし相馬屋製の厚さもちょうどいいし、インクの乗りも良く、和紙のような優しい肌触りである。しかも升目の様式や罫線の色にさまざまな工夫をこらし、バリエーションも豊富なので、自分に合ったものを選ぶことができる。

いつも使っているのはシンプルな一重の罫線で、目が疲れない緑色のものがある。しかも余白を大きく取っており、文章を訂正する時に欄外に引き出して書けるので実に使いやすい。作家の心理をよく心得えた、心憎いばかりの逸品である。

もう二十年ちかく愛用しているながら、私は相馬屋の何たるかを知らずにいた。そこでこの文章を書くに当たって取材をさせていただき、なるほどさすがは、という思いを強くした。

相馬屋は四百年前から神田川の近くで紙すき業を営んでいた。当時は和紙を作っていたが、明治になって西洋紙が入ってくると、作家や詩人の求めに応じて原稿用紙を作るようになった。

まさに斯界の草分けで、顧客には夏目



あべ・りゅうたろう ● 作家。福岡県生まれ。久留米工業高等専門学校機械工学科卒業。東京都大田区役所で図書館司書として勤務する傍ら執筆を始め、1990年『血の日本史』でデビュー。2005年『天馬、翔ける』で第11回中山義秀文学賞を受賞。13年『等伯』で第148回直木賞受賞。15年福岡県文化賞受賞。近著に『おんなの城』『半島に行く』『家康(一)自立篇』『宗麟の海』など。

大田区 六郷神社にて

漱石や志賀直哉、石川啄木らそうそうたるメンバーがいたという。

「弊社ではそうしたお客様のご要望に耳を傾け、そのたびに工夫を重ねて参りました。ご愛顧いただいているクオリティは、こうして築き上げたものでございます」

相馬屋の方の控え目ながら自信に満ちた説明を聞き、ここにも立派に歴史と文化が継承されていると敬服した。

原稿用紙は作家の土俵である。私はこの二十年間、漱石や啄木と同じ土俵で戦っていたのかと、何とも有難い気持ちになった。

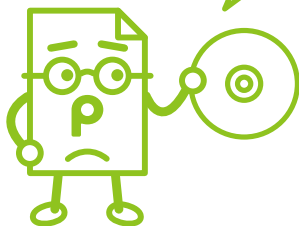
近頃はパソコンを使う作家が多くなり、原稿用紙の販売も苦戦を強いられているという。だが手書きの原稿だからこそ出せる文章の深みと味わいが確かにある。

そのことを若い作家の方々にも知っていただき、相馬屋のような風格のある老舗に足を運ぶ愉しみを味わってもらいたいものである。

ペーパー君のつ・ぶ・や・き 活動

古紙リサイクルは、デリケート。

CDやビニールなどが混ざるだけで、うまくいかなくなるリサイクル。古紙の質を上げて、良い再生紙をつくるためには、これらのリサイクルをジャマしてしまう物きんきひん(禁忌品)をきちんと取り除くことが大切なんです。レシートや写真などのように、紙製品の中にも、混ざるとリサイクルのジャマになる物があるので、ご注意ください。



紙のリサイクルをジャマする物(禁忌品)の一例

- ナイロン袋 ○CD
- 写真 ○カーボン紙
- レシート ○圧着はがき
- フィルム ○クリップ
- 匂いのついた紙 等



紙のことをもっと伝えたい。詳しくは、「ペーパー君のつ・ぶ・や・き」WEBサイトをご覧ください。 <http://kamitsubu.com/>